

## 平成30年度 第2回 浦添市総合教育会議 議事録

### 1) 開催日時及び開催場所

開催日時 : 平成30年8月31日(金) 午前10時00分

開催場所 : 浦添市役所 議会棟1階 102会議室

### 2) 出席者氏名

浦添市長 松本 哲治

教育長 嵩元 盛兼

教育委員 胡宮 なりえ

教育委員 池田 博暁

教育委員 長田 隆子

### 《事務局等》

市長部局

副市長：野口 広行、企画部長：下地 節於、企画課長：知念 伸男

教育委員会事務局

教育部長：新垣 剛、指導部長：平良 亮、教育総務課長：大城 博郎、学校総務課長：島尻 修男

学校教育課指導監：石川 博久、施設課長：宮城 直哉

### 3) 会議日程

#### 1. 開会

#### 2. 協議調整事項

(1) 小中一貫教育の検討について

#### 3. 閉会

### 4) 議題に関する出席者の発言

#### ○教育総務課長 (大城 博郎)

皆さん、おはようございます。総合教育会議の事務局をしております教育総務課の大城です。よろしくお願いたします。

これより平成30年度第2回総合教育会議を開催したいと思います。

本日の協議調整事項は、第1回の総合教育会議に引き続き、小中一貫教育の検討についてとなっております。早速ではありますが、市長、会議の進行のほうをよろしくお願いたします。

#### ○市長 (松本 哲治)

本日は、お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

会議がこれから始まるところでありますが、本日傍聴希望者はいらっしゃいますか。

○教育総務課長（大城 博郎）

はい。

○市長（松本 哲治）

本会議は原則公開になっておりますので、総合教育会議運営要綱第5条の「会議の非公開」に該当する内容は無いものと判断し、傍聴を認めたいと思いますが、よろしいでしょうか。

（は い）

○市長（松本 哲治）

それでは、傍聴人の入室を認めます。

よろしいでしょうか。それでは後ろにかけられている傍聴人の皆様へ、総合教育会議運営要綱第6条第3項の遵守事項を申し上げます。1. みだりに傍聴席を離れないこと。2. 私語、雑話または拍手等をしないこと。3. 議事に批評を加え、または賛否を表明しないこと。4. 飲食または喫煙をしないこと。5. 異常な服装または外套の類いを着用しないこと。6. 市長の許可を受けずに写真機、録音機、その他録音・録画を目的とする機器を持ち込み使用しないこと。7. その他会議の妨害となるような挙動をしないこと。以上7項目を傍聴人は守らなければならない、守らない者がいるときは、市長はこれを制止し、この命令に従わない場合は退場を命ずることができるとなっておりますので、何とぞ、御協力のほどよろしくお願いいたします。

それでは、これより平成30年度第2回総合教育会議を開催いたします。

本日は、第1回の総合教育会議に引き続き、小中一貫教育の検討についてを協議していきたいと思います。

前回の会議では、私のほうから当山小学校の過大規模解消に向けて、当山小学校、浦西中学校区に新たに、施設一体型の小中一貫校2校を新設するという提案をしたところでございます。教育委員会では、先進地視察等も行い、報告書をまとめていただいたところだと聞いております。その内容をもとに、小中一貫校の可能性について検討されたと思いますので、その件について協議をしていきたいと思います。よろしくお願いいたします。

それでは報告書によりますと、池間教育委員も視察に参加をしたということでございますので、実際に先進地をごらんになった御感想等をお聞かせください。

○教育委員（池間 生子）

では、よろしくお願いいたします。

京都市の凌風学園、それから東山開晴館の2校の視察をしてまいりました。その際に、まず具体的な報告をさせていただく前に、この2校はこれまで5年、京都市が小中一貫教育、あるいは義務教育学校を設置したいということでスタートして、5年から6年をかけて、そして今ようやく歯車が回ってきたというような、でき上がった時点での学校視察ということです。その中で一番小中一貫教育の中でよいというふう感じた点は、1年から9年生までを全職員で、同じ方向に向かって教育ができるということ。それから小学校、中学校という壁がなくなることで、子供たちの学び方の継続を図ることができるということ。それから具体的なことは、校長先生方のお話の中に、一番課題である、全国的にも課題である中1ギャップの解消が行われましたという、「なったかな」ではなくて「なりました」というお話。それから学力向上は、確かなものとして実感があると。ですが、中には課題もあるということでしたが、課題のほうもそのまま続けてよろしい

ですか。

○市長（松本 哲治）

はい、どうぞ。今回の視察をした上で見えてきた課題のほうですね。

○教育委員（池間 生子）

課題のほうとしては、先生方が一緒に仕事をしていくということで、子供たちの把握した内容を小学校から中学校へつなぐことが、今までは義務教育とは言われていてもなかなか深い溝があったが、しかしそれがスムーズに。つまり廊下を隔ててとか、あるいは職員室でとかというようなことで、子供一人一人の情報交換がスムーズにできるようになったという。先生方は中学校の指導の仕方、それから小学校の指導の仕方、これまで気づけなかった部分をお互いで慣らしていきながら。特に、こう言うと中学校の先生方にもかしらたら叱られるかなとは思いますが、中学校の先生方の細やかな指導が目に見えて変わってきたというようなこと等がありましたが、課題としては管理職の業務が雑多になったという話でした。校長の立ち位置、それから教務主任の立ち位置、教頭先生の仕事内容。それから管理職が多くなるので、その調整等というようなことで、子供たち、児童生徒、それから教職員に関してはプラスな点は多いが、管理職の部分、中間管理職も含めてのあたりでは課題は幾つか見られますというのが具体的な説明でありましたので、その辺はまた話の中で出せていけたらと思います。以上です。

○市長（松本 哲治）

今の報告を聞いていると、実際に京都に見に行くと、子供たちにとって、あるいは教育の連続性とか、中1ギャップとかというのも、解消については非常にプラスになるけれども、特に学校の管理職、あるいは管理運営の部分ではいろいろ課題が見られたということでよろしいですか。

○教育委員（池間 生子）

そうですね。中に入っているいいですか。分離新設の話も出していいですか。

○市長（松本 哲治）

はい。

○教育委員（池間 生子）

分離新設ということで浦添市教育委員会は、これまでいろいろな調査をしながら進めてきているという経緯があります。市長のほうから2つの小中一貫教育のできる学校を設置してはどうかと、前回提案があったということ。それを受けて、浦添市でどのような実践ができるかということでいろいろな方向から調べて、あるいは調査できる部分をやってきた中で、浦添市でもぜひ地域に合った義務教育学校づくりは大事なんだろうと考えていますが、それには建物をつくれればいいという問題ではなくて、この建物の中でという、子供たちがどのような教育を受けていくか。あるいはどういう体制にしていくかというのは、事前にきちんと把握しておかないと、あるいは計画を立てておかないと、入っただけでは義務教育学校としての質的なことを求めることは無理なのではないかというふうに感じました。それは2つの学校がちょうど1年先と1年後にできた学校ではあったんですが、その1年後にできた学校は、前年度にできた学校の施設を十分に改善をしてでき上がったという、両校の校長先生がそうおっしゃっていました。凌風のほうは僕らのことを参考にしてつくったので、向こうはうまくいっているだろうと。でも自分たちのところは、一応敷地とかいろんな意味でつくりましたが、不備というか、使い勝手が悪いところもあると。ですが、それを改善して凌風をつ

くったので、なかなかいい成果が出ているのではないかなという話もありましたので、今回の分離新設についても2つ小中で、若干言葉がきつくなるかな。つぎはぎと言ってはなんですが、小学校の建物に中学校が入ってくるような小さな体育館を一つとか、理科室を増やさなきゃいけないとかというようなつぎはぎの形をすると、結局は入っただけというような内容や質につながるとは思えないんですね。ですから、この2つに分けて小中一貫教育のできる学校をつくるということに関しては、もう少し時間が必要かなとは思っています。

○市長（松本哲治）

ほかの委員の皆さんはどうですか。池間先生を中心として視察に行った皆さんからの御意見は、いろいろほかの委員の皆さんも聞かれたんですね。

○教育委員（胡宮 なりえ）

聞きました。いいですか。

○市長（松本哲治）

はい。

○教育委員（胡宮 なりえ）

第1回の総合教育会議で、市長は小中一体型の場合、分離新設よりも早く実現できるのではないかと考えているとおっしゃっていました。市長のその提案に正直申し上げて、心が動いたのは事実です。その背景には、当山小学校の過大規模校解消を早期に実現してほしいという保護者や地域住民の声を、私たちも認識していたからです。しかし、調査していくうちに、報告を聞いて、小中一体型の場合も分離新設と同じくらいの年数を要するとの報告と、実現に向けては予算、そして人材、地域理解が不可欠であるということをつれ、ここはやはり当初の教育委員会の方針である分離新設を進める方がよいと思います。過大規模校解消に向けては、教育委員会が責任を持って執行することが求められていますので、ここで議論を長引かせて、保護者の皆さんの不安や動揺を助長させてはいけないと考えています。

○市長（松本哲治）

ちょっと待ってくださいよ。今の発言の中でむやみに、例えばつぎはぎでやって、地域の皆さんの不安が生じて時間が延びてしまうって話ですけど、そういうことは私は最初から一切申し上げていなくて、この問題の原点は、当山小学校の今現在も発生している過大規模を一日も早くどう解決するかということからの出発点なので、私が言っているのは、今ある既存の当山小学校と浦西中学校を活用して、発想を転換して2つとも小中一貫校にしてしまえば、より速く、よりいい教育環境をつくることができるんじゃないでしょうかという提案なんです。だから、ここを皆さんがきちんと理解した上で、京都でも先行しているところを見に行き、いろんな課題を解消する。その中で一日も早い当山小学校の今の現状の過大規模を解決する施策の一つとして、方法の一つとして、選択肢の一つとしてしっかり検討していただきたいと言っているわけです。ですから、この期間、皆さんが視察にも行っていろいろ議論もなされた上で、その私の提案についてどのようにお考えですかということをご聞かせさせていただきたいんですよ。

○教育委員（池田 博暁）

別の視点から少し考えてみたいと思うんですね。例えば第1回の総合教育会議のときに、市長から提案があって、私たちも考える機会を得たということは非常に重要だったと思うんです。世間には「なぜ今な

の？」という声もありますけれども、「いや、今なんですよね」という部分もまたあると思うんです。そういうことで本市における小中学校教育を、当山小学校の過大規模校という課題を当山小学校のみで考えるのではなく、浦添市全体での小中一貫教育を推進していくという視点、それを包含して検討していく必要があるのではないかということで、市長はそうおっしゃられておりました。私が聞きたいのは、市長は浦添市全体としての小中一貫教育のあり方として、当山小学校も考えていきたいというふうに今も思われているのかどうかというのを確認した上で質問させていただきたいと思うんですが、いかがですか。

#### ○市長（松本哲治）

私が少しこの問題を整理しますけれども、この当山小学校の過大規模解消については、ここ数年来、ずっと大きなテーマになっています。分離新設をするという方向も、これも解決策の一つだろうと思います。しかしながら、何度か繰り返していますけど、今年の春ですか、夏ですか、小中一貫校を2つつくるという方法が一番早くて、なおかつ新しい、今言ったような全国で始まっている、小学校と中学校を一つにすることで中1ギャップというのを解決するという、新しい教育のあり方というのも同時にチャレンジできるいいチャンスになるんじゃないかなと思ったんです。だから繰り返しますけれども、もう今ごろ、今さらという議論をしても、これはまだ建っているわけではないので、今であればもっと早い手があった。あるいはもっと教育の新しい挑戦ができる可能性があるのであれば、ぜひこれも今だからこそ、逆に言えば今しかできないからそれを検討していただきたいと言ったわけですよ。

それについては2つ問題を分けて考えると、当山小学校の過大規模を一日も早く解決するという問題。もう一つ、それとは別に、小中一貫校という新しい教育スタイルを浦添市で確立していく。少なくとも模索していく必要はあるんじゃないかと。2つあるわけですよ。ただ、これが当山小学校の問題に一つにできる、最初のモデル事例になるんじゃないですかということを私は提案したんです。ですから、そこがうまくいくようであれば、もちろん当然ながら、ほかの小学校の話になってくるでしょう。でも、これももう御存じだと思いますけど、ほかの中学校は幾つかの、複数区の小学校から上がってくるタイプの中学校なので、そういった意味では、今小中一貫校をやるのであれば、むしろ当山小学校、浦西中学校という、このエリアからやるというのがモデルケースとしても最適な地域、エリアなのではないでしょうか。だからこそ、だからこそ、今しか最後の検討するチャンスがないと思っているので、皆さんにしっかりそこも検討して、これは「もう何で、分離新設で進んでいるんだからいいじゃないですか」と。「もう決まったことを蒸し返さないでいいじゃないですか」というのではなくて、もう一回、地域の人たちを巻き込んで原点に戻って、もしかすると一番いい、一番やりがいのある、挑戦しがいのある教育的なチャレンジが、まさに当山小学校の過大規模解消の施策として検討できるかもしれない。だからその可能性もきちんと調べていただきたいと言って、この時間を皆さんにいろいろ研究をしていただいたと思っています。だからその部分についても、皆さんの意見を徹底的にここで出していただいて、議論をしていきたいと思っています。

#### ○教育委員（池間 生子）

そのためにいろんな方向からお互いで資料を持ち寄ったり、それから実際に文科省ともやりとりをしたりというようなことで行う中で、市長のおっしゃる、今だからこそ、小中一貫教育のできる学校が2つつけるのではないかというお話なんですけど、その机の上では、2つつけるというのはできると思いますが、本当に浦添市として、あるいは沖縄県の第1校をつくるとして、日本に、あるいは浦添市が誇る小中一貫教育にな

るかというところ、そこがなかなか納得かないという。つまり、建物は計算をしたところ、4年くらいはかかるという話なんです、4年くらい…。

○市長（松本哲治）

その建物はというのは、今ある当山小学校を改築して、浦西中学校を改築して、その場でやるという場合の工事に…。

○教育委員（池間 生子）

はい、4、5年という。

○市長（松本哲治）

それなりの時間がかかる。

○教育委員（池間 生子）

かかるという。4年、5年かかってできたとして、何回も同じ言葉を使わせていただくと、やはりつぎはぎでしかないという。つぎはぎがなぜ悪いかというと、同じ建物の中に小中学生が入れば、そこは小中一貫教育になるのかというふうに考えると、そうではないという。つまり、小中一貫教育をどのような形で進めていくのかとか、方針とか、それから人材とか、それから地域の理解とかというようなことを含めた、計画をしっかりとした上での建物でなければ、入れるだけではだめだと思うんですよ。ですから、どうせ浦添市でスタートしていく小中一貫教育をスタートさせるのであれば、今進めている分離新設の方向で進めながら、もっと時間をかけて小中一貫教育を推進する浦添市というふうな考え方のほうがいいのではないかと。ですから、どうしても今ある2つの学校で小学生が入るような、それから中学生が入るようなというふうにしても、中身はやっぱり京都で行ってきたこの2つ、たかが1年、されど1年の違いの学校でさえもいろんな改善を図っていきながらいい学校をつくっていく。それを本当に全国に向けて発信をし、それから文科省もそこを参考にしながら義務教育学校の素案をつくっていったという話も聞いていますので、そういうようなところに、どうせつくるなら。なので、どうやっても今ある学校に中学生が入るものを入れましょうとか、それから小学生が入るものを入れましょうとかというようなつくり方では、やっぱりまずいかなと考えています。

○市長（松本哲治）

長田委員は何かありますか。

○教育委員（長田 隆子）

はい。同じようなことでありますけれども、市長が提案している小中一貫教育については、今回の報告書からも、それから文科省が調査した調査報告からも、その成果は非常に大きいものというのを理解しています。ただ、この小中一貫教育を行うに当たって、例えば今当山と浦西にそれぞれ2校、そうすれば早くできるというお考えなんですけれども、早くできればいいというものでもなくて、今何度も池間委員からもありましたけれども、やはり小中一貫教育というのは、ただ今の過大規模を解消するだけという目的では来ていないと思うんですね。やはり子供たちの教育環境をよりいいものにしていく。これが小中一貫教育の本当の目的ですね。その小中一貫教育をするために、ただ当山と浦西にそれぞれつくればいいのかという、それが目的ではないと。子供たちの教育環境をよりいいものにしていくというための手段であると。小中一貫教育というのはですね。そういう意味では、早くできるかもしれないけど、じゃあその早くできる間に、しっか

りと浦添市の小中一貫教育に関する考え方とか、グランドデザインができるのかということ考えた場合に、ただ早くつくったために、逆に子供たちや職員に混乱を起こす状態にならないかと、非常に不安に思っています。ということでじっくり、さっき言ったように、視察報告にもあるように、地域のほうからも浦添市の小中一貫教育についてはどういう学校づくりをしていこうかという、そういう話も聞きながら、そしてもちろん、教育委員会のほうでもしっかりとそのグランドデザインを構築して、そして教職員の、これから義務教育の学校で、小中一貫教育で働くための心構えというか、この辺の醸成もしながらやっていくとなると、すぐ4、5年でというわけにはいかないと思うんですね。なので、やはり子供たちのことを優先に考えた場合に、すぐ2つ、2校に小中一貫教育をつくることで、きちんとした教育委員会としての小中一貫教育に関する考えもないままにスタートしてしまうと、現場が混乱してしまうのかなというのが非常に懸念されます。以上です。

#### ○市長（松本哲治）

はい、わかりました。あのですね、今日はいろんな整理をしていきたいと思うんですけど、皆さん誤解していないですか。さっきからつぎはぎだらけの校舎ではとか、過大を解消すればいいだけでっておっしゃいますけど、私は全くそんなふうには思っていないで、むしろ皆さんと私の危機感の違いだと思っていますよ。私はもう毎日、毎日来るんですよ。今の当山小学校をどうするんですかと。だから一日も早い、だって今日も明日も来月も、今、過大規模の中で子供たちが制約された教育環境の中で今やっているんですよ。だから地域の方も、PTAの皆さんもあれだけ思いを伝えているんじゃないですか。だから私はそれに応えるように、何が一番早いかということを行っているわけですよ。だから、確かにつぎはぎかもしれませんよ。それは既存のものにいろんなものがつぎはぎしていくよりは、丸ごと一個きれいに作ったほうがいいに決まっているじゃないですか。でもそれには時間がかかるので、一日も早い中で妥協して、まず当山小学校と浦西中学校を改築して、両方を一貫校にするということで教育的な利便もやりながら、なおかつ短縮して、一日も早く過大規模を解消するにはということで提案しているんですよ。だからそのためには、もう今さらだとか、何で蒸し返してという議論じゃなくて、やっぱり一日も早い方法は何か、なおかつ、よりよい教育環境を子供たちに残していくためにはどうするかということで、皆さんにも考えていただきたいと思っています。皆さんがですよ、教育という視点から、そこをしっかりと捉えて、じっくり時間をかけてやっていきたいという気持ちも、私もわかります。でも、もう待っている場合じゃない。じっくりやりたい、しっかりやりたい、きちんと固めてからやりたいって言っても、もう何年待たせるんですかということをおっしゃっているわけですよ。だから、この方法は早くて、解決もできるんじゃないですか。だからこの案をしっかりと皆さんのほうでも検討してください。私がこの案でもうやるんだと、頭ごなしでやることはしませんよ。だけどころいうオプションがある、可能性があるということも真剣に考えていただきたいということでの前の第1回だったんですよ。だから、これをただつぎはぎだらけで過大規模解消だけをすればいい、手っ取り早くやればいっていうふうに皆さんが捉えているのであれば、そもそもこの議論の根底が違ってくると思いますよ。

#### ○教育委員（池間 生子）

いいですか。過大規模校解消を度外視しているわけではなくて、一番優先して考えているつもりなんですよ。過大規模解消。それで長いこと、この教育委員会でもいろいろな下準備をしたり、それから人数の推移だとか、児童の推移だとか、いろんなことを浦添市として考えつつ、それから当山小学校のこととして考え

つつということ、いろんな調査をしてきて今に至っていると思うんですね。ですから、今さらということではなくて、市長が提案をされた、その早くて、しかも今日も明日も明後日も、保護者がどうなっているんですかという、こういう切羽詰まった状況も実感というよりは、そういう情報があるということは知っていますが、早くて過大規模解消ができるというのにしても、4、5年かかるというのであれば、過大規模を解消しつつ、それから小中一貫教育の中身の部分についても、内容についてもやはり充実をさせていくという。だから4年間一緒に並行させて考えていくという手もあるとは思いますが、手はあると思うんですが、どうしても小中一貫教育の中で大事にされなきゃいけないのは、同じ屋根の下に住めばいいということではないということが、逆に最優先なんじゃないかなと。早くできます。小中一貫教育で1年生から9年生まで連続した学びができます。先生方の成長もあります。でもそれは、その建物に入れたからすんなりとできるというわけではないわけで、その4年間の間でしっかりと研究をしながらという手もあるとは思いますが、どうやっても引かかってくるのは早くということで、この中学校の建物を小学校様式に変えていくというだけでは、後々逆に課題が大きくなっていくんじゃないかなというあたりまで踏まえているということを知っていただきたいというふうには考えます。ですから過大校とか、その今日も明日もというのを無視しているわけではないというか、逆に、そうするために早くつくりたい。しかし、小中一貫教育といういい提案もなされたので、それについてはしっかり勉強、確認をすればするほどよさは出てきますが、今の市長のおっしゃる2つを一緒にということでは、十分な成果を上げることはできないのではないかなと。とすると、やはり二の足を踏んでしまうという部分ですかね。

**○市長（松本哲治）**

ほかの委員の先生も同じような考えですか。

どうぞ、池田委員。

**○教育委員（池田 博暁）**

私はね、市長、こう思うんです。「なぜ今なの？」って言ったのは、法令の改正が今なんですよ。28年の4月1日から新しく学校教育法の一部改定によって取り組まれている。ということで踏まえたら、その以前にはそういう法律は改正されていなかったわけですから、今それが出てきたと。それがちょうどまた、私たち浦添市の実態に一致する形で出てきた。だから今なんだというふうに思っているんですが、例えば当山小学校が過大規模校になりました。浦城小学校はもともと過大規模校で、今ではもうプレハブも建っています。そういう中で授業をしています。浦添市は特に、状況を見ておりますと、5カ所の開発が進んでいると。前田小学校、または沢岬小学校もそういう方向に行くだろうと。そしてキャンプ・キンザーが返還されると、さらに港川小学校や、さらに浦城小学校、仲西小学校、それから神森小学校、宮城小学校と、そういう学校のほうがさらに増えてくるということはもう調査報告で、市長は既に御存じだとは思いますが、そういうような状況があるといった場合に、この浦添市全体の小中一貫をどうするのかということをしつかりと踏まえることが私は非常に重要なのかなと。もちろんその一環としての当山小学校の小中一貫なのではないかなと。思っているんですね。ですから、なぜ小中一貫をするのかとか、場合によっては小中一貫をどのようにして捉えているのかとか、小中一貫の基本方針であるとか、目指す子供像であるとか、学校像であるとか、教職員像であるとか、地域像であるとかという、そういう基本的なことをしっかりとやる。形づくっていくことがある意味、地域の皆様方に分離新設ですよと進めてきて、今度はまた小中一貫ですかというふうになっ

た場合に、説得力を持って、みんなでこういう方向に進めたいと思っているんだけどもどろろかど。みんなで考えていってみようではないかと。そして新しい学校としての姿を、地域のあり方を、PTAのあり方を考えてみようではないかということが、むしろそこから提案がされるのかなというふうに思っています。同時に、これはもう時代の流れでそういう方向に法を改正した時点で、文科省も新しい時代にふさわしい教育制度の柔軟化の推進ということがうたわれておりますので、私たちもやはりそういう方向性を踏まえて、その小中一貫をしっかりと捉えていく、そういうビジョンを描いていく、グランドデザインと書いてありますが、そういう方向性を踏まえた上でやっていく。だから市長が今おっしゃっていることは、私たちも一日も早く当山小学校の過大規模校を解消しなければならないと。しかし、その時点で結論を出されたのが、いわゆる分離新設という方向性でしたので、分離新設の方向性で進むのかなというふうには思っていたんですが、しかしそういうことばかりではなくて、新しいオプションが提案されて、その部分も含めて考えていくとなると、じゃあこの部分はということなのかということもきっちりと踏まえた上で作業を進めていかないと、むしろ混乱を招く可能性が十分にあるのではないかとというふうに私も思っていて、だから浦添市としての全体のグランドデザインを描く中で、当山小学校の過大規模校の現実的な解決策というものを提案していく時期かなというふうに私は思っているんですけど。

**○市長（松本哲治）**

胡宮委員も何かありますか。

**○教育委員（胡宮 なりえ）**

はい。市長の一日も早く過大規模校を解消したいという気持ちは、私たちも同じです。ただ、その当山小学校の過大規模校解消に小中一貫教育を持ってくる。早くできるとおっしゃいますけれども、私はこれまでの報告や調査内容から見ても、やはりこれは早くできないのではないかなと、逆に思っているんですね。やはり基本構想、浦添市がどういうふうにして取り組んでいくかというのを、別個に小中一貫を進める形でやっていったほうがいいのではないかなと思います。ですから、今回の件はリンクさせるのではなくて、別個に進めていく。小中一貫校というと、私は私立のイメージが強いんですけども、公立にそれが導入されるとなると、保護者は非常に期待すると思うんですね。子供たちも9年の見通した教育が受けられるということで非常に期待も大きいと思うので、準備不足を理由に、あるいは原因として、子供たちが安心安全な学校生活を送れないようになると、そういう影響が出てしまうと、やはり一番児童生徒に対して申しわけが立たないので、やはりここは時間をかけて、すんなりと小中一貫教育が推進できるというのは、私はもうちょっと慎重に考えないといけないことだと思います。

**○市長（松本哲治）**

ありがとうございます。そんなに意見は違ってないのかなと思ってるんですけど、私が最大に懸念しているのは、一言でいえば、例えば分離新設の可能性は否定しませんよ。だけれども皆さんも御存じのように、地権者の合意がとれてから少なくとも7年かかるって、今行政的な手続をやると7年かかると。ということですよ。これから。これは浦添市の土地があればいいですよ。だけど地権者が、それは浦添市の土地がないものだから、これから地権者からここを買い上げるのか、何かとにかく合意をして、そこからのスタートなんですよ。そうしたらそこから7年ですから、地権者の合意形成だけで、例えば2年とか3年かかったら、もう本当に10年ぐらいになるんですよ。じゃあ10年間も、いや、今分離新設頑張ってますから、

頑張ってますからって10年間、過大規模をそのままにしておくんですかって、そこを言っているわけですよ。だからこれも、先ほどから地域全体のこととかというのわかります。わかるんですけども、極端に言えば、分離新設を進めて10年かかって、10年後にはまた違う課題が出てきたときに本当に対応していけるんですかということも言っているわけです。だから私は、何度も言っているように、皆さんがじっくりやりたい。時間をかけてやりたい。それはとてもよくわかります。とても大切なことであります。だけれども同時に、どうやったら早く行くのかと。一日も早い当山小学校の過大規模を解消するのかと。本当に分離新設か。分離新設をノーとは言っていないですよ。でも分離新設には7年以上。下手したら10年ぐらいかかる。それをわかった上で、じゃあ10年間ぐらい待ってでもその方向をやろうというふうに地域の皆さんも、PTAの皆さんも、さらには子供たちの教育環境を担っている私たちも、それまでじっくり待つだけの時間的な余裕があるんですかということなんです。だからこそ、ちょっとでも、一日でも早く解決できる案としてそれを提案したんですよ。ただ、いいことでもありますけれども、小中一貫校という新しい教育の、何というんですかね、根本から変えるというか、本当に大きな大変革の一つですから、そこはしっかりと時間をかけて、教育委員会としてもじっくり練った上で地域に提案をしていきたいということもよくわかりますけど、そこをしっかりとお互いに理解し合ってやっていかないと、もう分離新設ありき、もう分離新設で決めたから走れ、走れ。あとはとにかく8年でも10年でも、もうそれしかないんじゃないですか。もう待てばいいんじゃないですか。地域の皆さんを待たせばいいんですよということでは困りますよと。だからこれからも常に、何が子供たちにとって一番いいのか。どうせだったら過大規模解消のためだけじゃなくて、これを機会に新しい浦添の教育スタイルの確立もやっていきたいと。でも、この分野になると、さすがにもう私だけではできないので、ぜひとも皆さんに研究していただいて、これからも小中一貫校という新しい教育スタイルが、浦添市の中でどんな形で地域の皆さんの理解を得ながら担っていけるかということを考えていただきたいということなんです。だから分離新設を否定しているわけでもない。だけど分離新設って決まったから、あとはもうそこしかないんだからって思考を停止して、ただ待つのではなくて、常に我々は新しい方法、新しい教育スタイル、新しい子供たちの時代の方策をこれからもどんどんどんどん研究していただきたいと。残念ながら、それだけに私が集中することはできないので、少なくとも教育分野に関しては皆さんがメインになって地域の皆さんと話し合って、一日でも早い過大規模解消と同時に、新しい浦添ができる教育スタイル、子供たちの未来を考えた教育スタイルの導入を並行してこれからも検討していただきたいということがあります。

#### ○教育委員（池田 博暁）

今、市長の話を聞いていて思ったんですが、市長とは何度も話しをしてきているので、非公式な場でも、非公式な場というか、もちろん皆さんと一緒に場面でも何度も話し合いをしてきていますので、市長がこの問題に関して覚悟を持って臨もうとしているというのは非常によくわかるし、私もそれは大事だろうなというふうに、大事だろうじゃなくて、大事だと思っています。同時に、市長がそういう覚悟を持つということは、教育委員会もそういう覚悟を持たなければならないというふうには思っているんですね。そういうことで、じゃあその小中一貫を、いわゆる過大規模校の解消も含めながら小中一貫を考えていくとなると、そこにはどうしても人材、それを検討する部署というか、人というか、いわゆるそれを組織する、組織としての存在がそこになれば、もうやりますよとは言っても具体的な作業は進まないだろうというふうに思う

んです。ですから教育委員会、要するに私としては、この小中一貫を進めていく、いわゆる過大規模校解消のための小中一貫を進めていくためにも、どうしても必要な人材を、人をやはり教育委員会は配置していただかないといけないのかなというふうには思っています。

それで具体的な話をすると、じゃあ今年から研究を進めていくから今年から配置できるのかとか、場合によっては新しい年度に、平成31年度に新しい職員を教育委員会の中に配置できるのかとか、そういったことも具体的な話の中ではテーブルの上ののせていかないと、思いはある。しかし、実際の作業をしていく、そこに人がいなければなかなか進まない部分もあると思うので、改めて市長には、そういう職員の配置等、いわゆる教育委員会内における、多分に想定されるのは小中一貫推進室なり何なりができ上がっていくかなというふうには思いますが、そういったところへの職員の配置が重要になってくるんだろうと思いますので、ぜひそこら辺も含めて市長は考えていただければいいかなと思っています。

#### ○市長（松本哲治）

今回の議論をめぐって私がいつも考えているのは、やはり問題を先送りにしない。これはじっくりやろう、じっくりやろう、だから次の人が考えればいいというようなものではなくて、やはり今ある課題は、今ある人たちが責任を持って解決したいんですよ。だから私が私の立場であるうちに、次、誰かが、いつか誰かが考えればいだろうという先送りではなくて、一つ一つを解決して次の時代に担っていく、伝えていくというのが私たちの責任だと思うんです。それは教育委員の皆さんも、これから未来永劫、皆さんは教育委員でないということであれば、やはり私たちでどう解決していくのかということもしっかりと検討していきたい。だからこそ真剣に、一日も早く、なおかつ、よりよい教育のためのあり方を議論してもらいたいと、本当に強く思っているわけです。地域にはいろんな意見がありますよ。何を選択しても反対する人はいます。でも、やはり我々は純粹に、一日も早く当山小学校の過大規模が解消されつつ、同時に、これを機会に教育とは何かと。これから新しい浦添で行える、子供たちに与える教育とは何かということもしっかり検討していかなければならないというふうに、私たちは同じようなモチベーションで、同じ気持ちでここに集っていると信じておりますので、しっかり検討していただきたいと思います。これは教育委員会の話だけじゃなくて、この街の子供たちの未来づくりをどうするかということになれば、これは教育委員会だけじゃなくて、全てを全庁的に議論していかないといけないということですから、そういった新しいテーマに向かってやっていくために人的な配置が必要ということであれば、それは我々でまた今度、市長部局でもしっかりと人員配置について議論をして、その新しい時代の課題に対応できるような職員体制についても前向きに検討していきたいと思っています。

#### ○教育委員（池間生子）

繰り返しになるかなとは思いますが、言っておきたいので。分離新設でとどまるなという、今までの案があるのでそこにとどまって思考が停止するなっていう市長のお言葉なんですけど、停止しているわけではないんですよ。逆に、その方向で進んでいたときに、市長のほうからの2校、小中一貫教育の学校をつくったらどうかという提案については、みんな一度止まったんですね。「あつ、そういう案もあるのか」。そこから小中一貫教育の勉強会や、それから視察や、それからいろいろな情報をお互いがお互いの位置で収集してここに来ているわけで。調べれば調べるほど、やはり安易に小中一貫教育という旗のもとに2つをつくってはならない。あるいは2つをつくるのであればなおのこと、池田委員がお話するように、その人材を確保し、

そして浦添市当山を起点として、浦添市の小中一貫教育とはこういうような形で、同じ方向で進んでいきたいという教育委員会としての方向性をはっきりといろんな意味から、人材もそうなんですか、人材というか、先生方のことも踏まえ、それから建物やソフトの面も全てを、この方向で行きますという専任を置かなければならないというところに話は落ち着いてくると思うんですね。ですから止まっているわけではなくて、過大校を解消したい。分離で進んできた。市長のアイデアで一度止まって、浦添市の教育、あるいは学校をつくるということについて改めて考えてみた。そして、文科省のいろんな意見が出てくることを浦添市に当てはめていくとすると、浦添市の小中一貫教育、あるいは義務教育学校というのはどうあらねばならないかということを引きちんと確認をしなければならない。そのためには人も必要だし、それから即、早くっておっしゃるところはもう重々承知なんです、即、早くやって手落ちがないようにもしたいという。教育ですから、一度少し向きが変わってスタートすると、なかなか修正が不可能に。不可能というか、簡単にはできない部分も出てくるので、何ていうんですか、つくるという、早くできるということと、内容の充実をさせたいという2つの面から何とか折り合いをつけてやれる方向はないかというので今、委員で何度も話し合いをしているところなんですね。ですから、建物をつくるだけだったら、確かに分離新設でいうと7年、8年かかるところが、4年、5年でおさまるという部分もあるかなとは思いますが、本当にそれでいいのかとまた問い直すと、やはり沖縄県を代表して義務教育学校をつくるということになったら、ある程度の浦添市の方向性をしっかりと構築したいという思いもあって、なかなか市長の思いのように「つくろう」というのに、「そうだ」って言えないところがあって、やはり中に入る児童生徒のことを考えると、教育委員会としてはきちっと。きちっとじっくりという言葉が市長は今日は引っかかっているようなんですが、やっぱりじっくりとやっていくということは、じっくりというか、しっかり固めたいという部分は強調したいかなど。止まっているわけじゃない。逆です。止まっているんだしたら、分離校でそのままというふうを考えるんですが、小中一貫、しかも2つ同時にという案に出だし、飛びついたというのは事実で、そこから「では何なのか」というのを考えた結果が、今日の話の内容になっているんだと思っています。

#### ○市長（松本哲治）

わかりました。今日、こんなにいろいろ議論できたのはとてもいいことだと思います。私もちょっと言葉が強くなってしまいましたけれども、これから今、困っている子供たちがいるので一日も早く、よりスピーディーさを求められるという側面と、だけれども県内で初めて義務教育学校、小中一貫校を浦添から発進していく上では、やはり未来に対してもそうですし、他の市町村に対してもモデルとなるようなものをしっかりと構築していきたいということだろうというふうに思っております。決して皆さんが思考を停止して、これが決まったから決まったで、これだけを進めればよいというように停滞していると私自身が思っているわけではありませぬので。ですから今、議論されている分離新設の方向性もしっかりとやりながら、でも私が今回提案した新しい教育の可能性というものもぜひ浦添からやろうじゃないかと。それをまた当山からやろうじゃないかということもお酌み取りいただいて、2つ並行してというか、あらゆるオプションを閉じることなく、皆さんで議論を継続していただきたいと思っております。なかなかスピーディーにやりながらじっくりというのは、相反することでありませぬけれども、やはりその中から一番の妥協点を見出していかなければいけないのが現実の行政であり、教育でもありますので、ぜひ地域の皆さんや、特にPTAの皆さんとしっかりとこれからも議論を交わして、私もいろいろ地域には出て行って意見交換したいと思っておりますけれども、そ

の思いを伝えてみんなでつくっていく浦添の教育のあり方というものを、ぜひ皆さんが中心になって進めていただきたいと思います。

**○教育長（嵩元 盛兼）**

私も最初に聞いたときですね、すばらしい案と思ったんです。これが教育委員でできる、市の協力を得ないといけない。県の教育の人事の協力を得ないといけない。当山区域のPTAの理解じゃなくて、浦添のほかの地域の理解も得ないと実は進まない。だから県と、それから浦添市の当山以外の全体の理解も得ないと、当山だけで議論をしても飛び出て、「じゃあ俺たちどうするの？」という話につながるので、あまりにも私たちができる範囲とは別に、説得相手が県もいて、市の全体の他の地域とも、教育委員会と具体的に小中一貫は次はどうする、次はどうなるという全体像についての理解も見ないといけない。そのためには急ぎ当山だけの話に行かないということ。実は自分たちでできるものとできないもの、そこを理解していただかないと、私たちができることであれば、全力でやればすぐできるところ。私たちの努力では当山小学校のPTAと内部の人事ぐらいしかできないので、やはり小中一貫校をやるとなると、本当に那覇地区の教育委員の先生方の全体の理解がないと浦添に行かないと。行きたくないとかという話まで余波が出るので、そこまで説得力のある浦添のモデルを先に打ち立てないと、多分県の理解、浦添の他の地域の保護者の理解、これから小学校に上がっていく親の理解、そういうものも含めているので、やはり基本形をしっかりと立てたいというのが教育委員の気持ちですので、決して、私たちだけでできることで市長にやりましようと言えないところは理解していただきたいと思っています。

**○市長（松本哲治）**

それだけいろんな絡みというか、背景があったり、いろんな関係機関があるので、そこでの合意形成もしていながらじゃないと進められないということだろうと思います。ただ、先ほどから言っているように、でも現場では実際に今子供たちがいますから、その緊迫感というか、その切羽詰まった思いというのを我々がやらないと、行政はいかんせん、どうしてもじっくり、じっくり、100点満点をつくるために何年も何年も時間だけかけていくというのがありますから、そういった意味では、しっかりといいものをつくる。関係機関の合意形成をしっかりと取りつけていくということと同時に、やはりトライ・アンド・エラーを繰り返してこそ、いいものができるということも理解を得ながらやっていきたいと思っています。こういう議論をもっともっとやりましよう。ただ何か言いたいことだけ言えばいいというのであれば簡単なんですけど、やはりいろんな視点のいろんな考え方もみながら、一歩ずつ、一歩ずつしか行けないのが行政ですから、これまで進めてきた分離新設の方向、かつ小中一貫校、あるいは新しい義務教育学校のあり方を我々だけじゃなくて、もちろん県の関係者も、もしかしたら日本中の関係者もみんな踏まえて、よりよい沖縄の新しい教育のあり方をこの浦添市から発進していくんだという熱い気持ちが、今日皆さんと一緒に共有できたのはとても収穫だと思っていますので、これからもまた皆さんの御尽力、御協力を期待しております。そろそろちょうど11時という時間になりましたので、何かほかになればこれにて終了したいと思います。いかがでしょうか。

**○教育長（嵩元 盛兼）**

はい。急いで進めたいと。気持ちは一緒ですので、ぜひ体制づくりに御協力をお願いして、全庁的な理解がないと、教育委員だけではちょっと力が弱いので。

○市長 （松本哲治）

それもバランスの問題だと思っていますので、やはり一日も早い子供たちの環境の解消と、その次の世代に先送りしない。今の問題は自分たちで解決していくという、そこも大切でありますので、だからといって安易にやって、あとごちゃごちゃしたら自分たちで考えれってというようなのもできないということですので、しっかりそこは今後も議論をしてみたいと思います。よろしいでしょうか。

（は い）

○市長 （松本哲治）

それでは予定11時が来ておりますので、そろそろ終了の時間としたいと思います。

それでは第2回総合教育会議、これにて閉会といたします。どうもお疲れさまでございました。